

松尾館跡と宇多河氏

松尾集落の東、菅原神社の裏手に「松尾館跡」があります。「館跡」とは、主に鎌倉時代から戦国時代に作られた敵の侵入を防ぐことを目的に堀や土を盛り上げて築いた土塁などを備えた防御のための施設で、平地にある場合はその土地を治めていた人が住む屋敷になっていた場合があります。松尾館跡の大きさは東西約52m、南北約50mで、北側は松尾川に面した急崖になっています。この館跡には幅約2mの浅い空堀や、高さ約1m、幅約2mの土塁が残されているほか、南側と西側には出入口である虎



松尾館跡に残る土塁(左)と空堀(中央)

口が設けられ、空堀を渡るための土橋などの遺構も確認できます。

また、松尾館跡は宇多河(川)氏が住んでいたもので、「宇多河館跡」とも呼ばれています。宇多河氏はもともと山城国葛野郡宇多野(現在の京都市)を本拠としていた豪族で、松尾神社を崇敬していました。故あって関東に下って鎌倉幕府の御家人となり、芦名氏との関係から会津・松尾の地頭になったものと考えられます。この館跡の近くにある真福寺は文永5年(1268)、宇多河信濃守道忠によって鎌倉

五山寿福寺の僧慈心とともに中興され、この寺の福島県指定重要文化財「木造地藏菩薩坐像」は道忠の発願によって康安2年(1362)に作られたものになります。ただし、真福寺中興と仏像製作には94年の開きがあるため、道忠が両方の出来事に関わっていたかは疑問です。

やがて松尾館には、宇多河氏の子孫である長谷川氏が住むようになります。「奥州会津川沼郡稲川庄松尾村松尾山真福寺縁起」によると、天正17年(1589)、伊達政宗の会津侵攻により真福寺は焼失、松尾館も落ち、長谷川氏は散り散りになってしまい、翌18年に蒲生氏郷が会津領主になると野に下った、との記録があります。その後、子孫の久七が天和3年(1683)に野沢組郷頭となり、江戸時代の一時期を除いて長谷川氏が代々、この職を務めることとなります。

今月の表紙

今月は、令和5年消防出初式の分列行進から。当日は時折小雨が降る中での実施でしたが、同気食堂前の交差点から道の駅にしあいづまで分団ごとに堂々と行進しました。

(6ページに関連記事)

編集後記

携帯電話やインターネットの普及によって浸透してきたQRコード。携帯電話などの専用アプリやカメラ機能で読み取るだけで、指定のウェブページにアクセスできるほか、近年では電子決済にも活用されています。

携帯電話を持つのが当たり前になった時代、広報にしあいづでも主にお知らせのページで積極的にQRコードを活用しています。引き続き、読者の皆さんに有益な情報をお伝えできるよう活用していきますので、スマートフォンを片手に広報紙を読んでみてください。(秦)